Fora 6 (2023): 1-14

ジェンダーが入れ替わる小説に見られる日本語の自称詞

—イデオロギーとメタ言語分析—

高村　遼

要旨

自称詞は話者を示す言語資源以上のものである。男女が入れ替わる小説において、入れ替わった相手の性に基づいて話す努力や指導が見られた。すなわち、自称詞の選択は、話者の性によって決定されるというイデオロギーの影響を強く受けている。それがメディアや文化によって再生産される過程を量・質的に分析した。また、今回分析した３作品（1980、2006、2016 年出版）を通時的に観察すると、ほとんどの発話に自称詞が使われていた 1980 年の作品（『おれがあいつであいつがおれで』）と比べて、2016 年の作品（『君の名は』）にはほとんど見られなかった。自称詞の省略形が話ことばにみられることや（久野 1978）、そもそも言わないという報告があるように（金谷 2002）、現代小説においてもそのような傾向が反映されていることが確認できた。

キーワード

自称詞、男女が入れ替わる小説、ジェンダー、イデオロギー、メタ言語

1. はじめに

自称詞（self-address term）は、「話し手が自分自身に言及することばのすべてを総括する概念」（鈴木 1973）であり、直示表現（deictic expression）のひとつである人称直示（person deixis）に分類される。直示表現とは、発話状況を中心としたコンテクストを参照することによって初めて指示内容等が確定する表現（東森 2012: 15）である。日本語における自称詞は、話し手のアイデンティティおよび聞き手との関係性を同時に指標することがある。一方で、英語の一人称代名詞 I とは異なり、必ずしも自称詞によって話し手自身を指す必要もなく、いわゆる自称詞の省略ができる（久野 1978）。小説の会話文などの場合、作者は例えば、「俺」という自称詞を用いることで、読み手に対して、その発話者は「男性」であるというイメージを想起させる（Cf. Inoue 2003）。これは、日本語話者であれば、「俺」は一般的に男性が使用するものである、というイデオロギーに基づいて行われている。しかし、実際「俺」という自称詞は男性以外の話し手が使うことは報告されている。このことから、「俺」という言語資材は男性性とは直接的かつ必然的な結びつきはないものの、「男はこのように話す」というイデオロギーのもとで繰り返し、生産される過程を経て、あたかも「俺」や「僕」という自称詞が男性専用として信じられているのである。

本稿では、このような自称詞に対するイデオロギーやメタ言語が生産され、支持されてきたことを男女が入れ替わる小説を分析することによって検討していく。

本稿の構成は次のとおりである。まず、２節ではこれまでの日本語の自称詞の研究を概観する。３節では、データとなる小説の３作品に出てくる自称詞のバリエーションを量的

（3.1）・質的（3.2）に分析する。分析対象は会話文における自称詞に限定する。３作品の発行年には間があいており、通時的に見て、自称詞の頻度の移り変わりも見て取れる。４節では、作品中における自称詞に対する登場人物たちによるコメント、いわゆるメタ言語を通し、自称詞とジェンダーの強い結びつきのあり方を考察する。そして５節で結論を述べる。

2. 日本語の自称詞

日本語の自称詞の代表的な研究に鈴木（1973、1982）がある。鈴木（1973: 146）は、自称詞を「話し手が自分自身に言及することばのすべてを総括する概念」と述べており、「わたし」や「僕」という代名詞以外に、「先生」という役割名も自称詞に含めている。金水（2003: 137）もまた、自称詞を「役割語」として捉え直すことが可能であると指摘する。役割語を、「ある特定の言葉使い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと、特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができる」（Ibid.: 205）ものと定義し、いわばある言語表現が特定のステレオタイプを想起させることを意味する。例えば、「ワシ」という自称詞はお茶の水ハカセのような「男性の博士」のイメージを呼び起こす。しかし、データのひとつとして分析した『君の名は』に登場するおばあちゃんは方言として、「ワシ」を一人称に使用すると作品中で語られている。

一方で、日本語の自称詞にはジェンダーが文法化されているという研究も報告されている（e.g. 井出 1982、益岡・田窪 1992、Shibatani 1990）。Shibatani は、自称詞は話し手の性（sex）とスピーチレベルによって制御されていると述べ、男性は、私、わたし、僕、俺を、女性は、私、わたし、あたしを一人称自称詞としてそれぞれフォーマルとインフォーマルの場面に即して使い分けると報告している（Ibid.: 371）。こうした話し手の性に即した区別は、欧米語の I（英語）や je（フランス語）には見られない日本語の特徴のひとつである。

しかしながら、実際の日常会話において、男性専用語として認識されている「俺」という自称詞は茨城の農家の女性（Sunaoshi 2004）、二丁目のバーで働く女性（Abe 2004）などによっても使用されていることから、言語資源としての「俺」が男性専用語ではないことがわかる。また、役割語も結局のところ、性のステレオタイプと結びついていることは否定できないだろう。

したがって、自称詞はどのような話し手でいたいか、どのような場で誰と話しているのかを示す言語資源であり、その選択はコンテクストの中で常に交渉されているのである（Cf. Hanks 2005）。このような自称詞が持つ意味を「社会文化的コンテクスト」という。社会文化的コンテクストとは、対象や聞き手に対する話者の感情や態度をはじめ、話者と聞き手の対人関係（年齢、上下関係、親疎関係）、話者の性別、場面の改まり度などを指標する（成岡 2016: 40）。いわば、話し手のスタンスを表明する言語資源である。

本稿では、男性や女性にどのような一人称自称詞の使用が求められているのか、言語イデオロギーという視座に立って検討する。言語イデオロギーとは、私たちがことばを理解するときに用いる言語に関するさまざまな信念・常識・知識を指す（中村 2007a: 28）。そこで、男女が入れ替わる主題を持つ小説の一人称自称詞を分析の対象にする。男女が入れ

替わった小説においては、入れ替わった相手の立場を意識してより自称詞の選択に注意したり、あるいは周りから自称詞を指摘されたりするなど、言語イデオロギーが表面化されるためである。このように、自称詞について「語られる、語る」ことばを「メタ言語（metalanguage）」と呼ぶ。

3. 小説の中に見られる自称詞

日本語の自称詞に対するイデオロギーを観察するにあたって、本稿では男女が入れ替わる設定の小説の３作品を対象とした。それぞれの概略は以下である。まず、３冊の中でもっとも古い作品として、１作品目は『おれがあいつであいつがおれで』（山中 1980 [2012]）である。小学校６年生の斎藤一夫と同級生である斉藤一美が頭をぶつけたことで入れ替わる。２作品目は『パパとムスメの７日間』（五十嵐 2006 [2009]）を選んだ。46 歳のパパと 16 歳の娘である小梅が電車内の事故によって入れ替わる。そして、３作品目は『君の名は』（新海 2016）である。主人公である女子高校生の三葉と男子高校生の瀧が夢の中で入れ替わる。三葉は田舎で暮らす一方、瀧は東京で都会生活をし、二人は直接会ったことはない。いずれも映画化やドラマ化されている。

分析の対象にした自称詞は実際に、入れ替わった相手としての発話（作品中では主に「　」で表されている）に限定し、地の文に現れる、いわゆる本人（入れ替わる前）の心の声に見られる自称詞はカウントしていない。

3.1 量的分析

ここでは、ぞれぞれの作品に出てきた自称詞のバリエーションとその出現数を示す。登場人物については、A の精神が B の外見に入った場合を A（B）と表す。例えば、一夫の精神が一美の外見になっている場合は、一夫（一美）表記する。

①『おれがあいつであいつがおれで』（山中 1980）

この作品においては、「おれ」「ぼく」「あたし」「わたくし」「わたし」の５つが認められた。自称詞のバリエーションを縦の列に、その自称詞が使用された相手を横の列に示す。右端には「　」で表された発話総数を示す。これ以降も同様に示す。

表 1　一夫（一美）の自称詞の使用

相手 / 自称詞	一美	ママ	一美ママ	先生	校長	あけみ	弘	敦子	親戚	合計	発話総数
おれ	48	5	4	3	0	3	0	0	0	63	376
ぼく	0	1	0	1	1	0	0	0	0	3	
あたし	4	0	6	0	3	0	1	3	1	18	
わたくし	2	0	0	1	3	0	0	0	0	6	
わたし	0	0	2	0	1	0	0	0	0	3	

まず、一夫（一美）は、「おれ」を最も多く使用し（63 例）、その大半は一美（一夫）に向けられている（48 例）。一夫と一美以外の人がいた場合や、入れ替わった相手の友人（あけみ、弘、敦子）に会うときには「あたし」を使用した。校長に話す場合には、最も使用した「おれ」から「ぼく」にシフトしている点は、もとの性に即したわきまえの姿勢を示している。

表 2　一美（一夫）の自称詞の使用

自称詞＼相手	一夫	先生	校長	弘	合計	発話総数
おれ	4	0	0	1	5	244
ぼく	1	0	0	0	1	
あたし	45	1	2	0	48	
わたくし	0	0	0	0	0	
わたし	0	0	0	0	0	

一方で、一美（一夫）は、「あたし」を最も多く使用し（48 例）、ついで「おれ」を使用している（５例）。小説の構造上、一美は主に、一夫と話す機会が多いことが理由にあげられる。むしろ、「俺」を使う練習を一夫（一美）に対して（４例）、また、意中の友人の弘に対しては、一美（一夫）が一夫として、自分の印象を向上させる際に使用した（１例）。なお、一美（一夫）の「おれ」には一夫（一美）の発話を引用した１例を含んでいる。

この作品では、一夫（一美）が使用した自称詞は「ワタクシ」「アタシ」「ワタシ」、一美（一夫）が使用した自称詞「オレ」「ボク」がカタカナ表記になっている。カタカナを使うことで、ある種の異質性を醸し出し、あたかも自分の本当のアイデンティティと相入れないこと表出している。これも日本語体系をうまく利用した、書きことばならではの工夫である。それゆえ、一美（一夫）が引用した「おれ」はひらがな表記であった。

②『パパとムスメの７日間』（五十嵐 2006）

この作品においては、「あたし」「私」「パパ」「中年男」の４つのバリエーションが認められた。なお、パパに入れ替わった小梅は「わたし」というひらがなの表記が１例あったが、「私」はおそらく「わたし」と読ませているとして、「私」に含んだ。

表 3　パパ（小梅）の自称詞の使用

自称詞＼相手	パパ	ママ	先輩	同僚	西野	友達	合計	発話総数
あたし	10	0	0	0	0	0	10	244
私	2	0	4	2	2	0	10	
パパ	0	0	0	0	0	0	0	
中年男	0	0	0	0	1	0	1	

この作品は①とは異なり、「俺」や「僕」という自称詞は見られなかった。まず、パパ（小梅）は、自分の姿になった娘の小梅に対しては、「パパ」と役割を自称詞として使用している（鈴木 1973、1982）。このことから、「俺」という強い男性性を表す表現よりも、娘との関係からみたパパである父親としての役割に重きを置いた結果であると考えられる。

表 4　小梅（パパ）の自称詞の使用

自称詞＼相手	小梅	ママ	先輩	同僚	西野	友達	合計	発話総数
あたし	1	1	2	0	2	2	8	210
私	1	0	0	0	0	0	1	
パパ	15	0	0	0	0	0	15	
中年男	0	0	0	0	0	0	0	

「パパ」という表現の他に、「中年男」が１例認められた。小梅（パパ）が、西野という社員に好意を抱かれた際に、自虐を込めてパパとしての自身を「中年男」と呼んだ。このように代名詞だけにとどまらず、相手との関係の中の役割や、自身の性と年齢に基づいた表現も自称詞として使用している。

③『君の名は』（新海 2016）

この作品においては、「私」「わたくし」「俺」「僕」の４つのバリエーションが認められた。作中では、本来「私」を「わたくし」と読むところを「わたし」と読ませ、「わたくし」をひらがな表記にしている。

表 5　瀧（三葉）の自称詞の使用

自称詞＼相手	友達	呟き	合計	発話総数
私	2	2	4	42
わたくし	1	0	1	
俺	4	0	4	
僕	1	0	1	

瀧（三葉）は、「私」を最も多く使用した（４例）。①と②では「あたし」という表現が見られたが、本作においては確認されない自称詞であった。呟きとは、自分自身に対しての発話である。「俺」（１例）は実際には会えていない三葉に対しての呼びかけで使用された。

表 6　三葉（瀧）の自称詞の使用

相手 / 自称詞	友達	三葉	呟き	合計	発話総数
私	4	0	0	4	78
わたくし	0	0	0	0	
俺	1	1	1	3	
僕	0	0	0	0	

三葉（瀧）は、自称詞を使用した（詳細は例８）。また、特記すべきは自称詞の使用率の低さである。先の①②と比較すると、総発話数がもともと多くないものの、自称詞の仕様は著しく低い。このことは、自称詞の省略形が好まれていると解釈することができる。実際、日常会話においても、省略形は好まれており（久野 1978）、むしろ日常の自然発話に近い形といえるだろう。

3.2 質的分析

これまで３作品におけるさまざまな自称詞のバリエーションを見てきたが、それらがどのように使われるのかを本節では検討する。「僕」も「あたし」も話し手を直示することに変わりないが、日本語の自称詞は相手との関係性やコンテクストに依存し、常に交渉するものであることを次の３つの観点から考察する。まず、１つ目はもとの性・役割に即した自称詞の使用の場合（3.2.1）である。たとえ入れ替わったとしても、当事者以外の参加者が認められない場合には、入れ替わる前の自称詞を使用する。２つ目は、入れ替わった相手の性を意識する場合（3.2.2）である。当事者以外の参加者が認められる場合に、入れ替わった相手の性に即した話し方をする。そして、３つ目は、同一人物による自称詞の使い分けの場合（3.2.3）である。同じ話し手が複数の自称詞を選び、使用することができる。

3.2.1 もとの性・役割に即した自称詞の使用の場合

当事者にとっては、姿が変わっただけで友人あるいは親子という関係性には変わりない。作品では、入れ替わった者同士がどのようにお互いの問題を解決するか、に焦点が置かれているので、入れ替わる前のもとの性に即した自称詞が多く使われていたことはこれによって説明がつくだろう。

次の例(1)は、作品②において、小梅がパパとして会議に出席する代わりに、意中のケンタ先輩とのデートに小梅であるパパがその代行をするように、依頼している場面である。（　）に入っている名前は、入れ替わった相手の姿であることを意味する。なお、地の文

は発話としてはカウントせず、［　］で示す。

例(1)

1 小梅（パパ）：もういいよ！明日、パパが先輩と会ってくれないんなら、
→2　　あたし火曜日のナントカ会議で素っ裸になってやる！
［急にパパが黙り込んだ。いきなり攻め込まれて動揺しちゃったけど、落ち着いて考えたら立場は互角が。あたしばかり言われることはない。ねえ、どうすんのよ、パパ］
3 パパ（小梅）：いいだろう
［しばらく考え込んだパパが、突然素直にうなずいた］
→4　　明日、パパがそのケンタ先輩と会えば、お前も日曜日、
5　　会社に行ってくれるんだな？

『パパとムスメの７日間』p. 180

小梅（パパ）は、パパとしてではなく、もとの小梅として、自分のことを「あたし」と 2 行目で呼んでいる。同じく、パパ（小梅）も、自分のことを小梅との関係から、4 行目で自分を「パパ」という役割語で呼んでいる。この二人のやりとりでは、他の聴衆が認められず、入れ替わった相手の性や役割を気にする必要がない。特に、「パパ」は、相手が自分の子ども（まれに配偶者）に対する専属的な表現であり、父と娘という関係性から入れ替わる前の性・役割に即した自称詞が選択されている。

3.2.2 入れ替わった相手の性を意識する場合

ここでは、入れ替わった当事者以外の人が会話に加わったり、認めらたりする場合に、その人の存在が自称詞の選択に影響を与えている例を紹介する。

次の例(2)は作品①において、一夫（一美）が学校の構内で校長先生とぶつかり、二人とも救急車で病院に搬送される。そこへ、一美（一夫）が見舞いに来て、自分の姿になっている一夫の容体について尋ねている。同じ病室には、一美、一夫と校長先生がいる。

例(2)

1 一夫（一美）：あのな、よく聞いてくれよ。いや……よーく聞いテヨ。
2　　あのとき、校長先生が、あそこにいたから、おれ……
→3　　アタシの顔が、この程度の傷ですんだノヨ。そうでなきゃ、
→4　　アタシの顔は、あちこち、かぎざきで、フランケンシュタイ
5　　ンのモンスターみたいになってたかもしれないノヨ。（中略）
［一美は、じっと、おれの顔を見た］
6 一美（一夫）：ワカッタ
［そういうと、一美はおれと校長先生のベッドの境のカーテンを、シャーッと開けて、校長先生のほうを見た］
7　　：校長先生。本当に、どうもありがとうございました。

『おれがあいつであいつがおれで』p. 85f

1 から 5 行目にかけて、一夫（一美）が一美（一夫）に向けて話し、6 行目では、一美（一夫）が一夫（一美）に向けて話している。この例では、一夫と一美はそれぞれ入れ替わった先の相手の性を意識して発話している。いずれも当事者間でのやりとりだが、二人の会話は校長先生に聞かれている、と二人が認識しているためである。

まず、2 行目で一夫（一美）はもとの自分の性に合わせて「おれ」と発話し、3 行目で「アタシ」と修正している。この作品においては、入れ替わった先の性に合わせて自称詞や終助詞（文末の「よ」「わ」など）を使う場合は、カタカナ表記になっている。

Bell (1984)は、オーディエンス・デザイン（audience design）という理論を提唱し、話し手と相手の立場や払う注意の量などが会話に影響を及ぼすと主張している。この理論に従えば、話し手を中心にしたとき、聞き手（addressee）、傍聴人（auditor）、偶然聞く人（overhearer）、盗み聞く人（eavesdropper）の順に注意の量が遠ざかる。この例(2)においては、一夫と一美は、互いにとって聞き手に相当し、この二人の会話を聞く校長先生は、傍聴人に相当する。この傍聴人は、話し手によって、その存在を知られ、かつ聞くことを認められている存在である。したがって、直接話しかけられていなくても、その存在の影響は大きく、一夫と一美は入れ替わった相手の性に合わせた自称詞や終助詞の選択を迫られているのである。

次の例(3)は作品③において、三葉（瀧）が友人に誘われてカフェでメニューを選ぶ場面である。三葉は田舎で暮らしているため、瀧が普段行っているカフェの価格の高さに驚いている。瀧とその友人との関係で最もふさわしい自称詞「俺」を使うが（例 8 を参照）、心の声のつぶやきである地の文では、「私」を使用している（二重下線）。

例(3)

1 司　　：瀧、決まった？
［司くんにうながされ、私は店内観察を中断しどっしりと重い革表紙のメニューに目を落とす。］
2 三葉（瀧）：……！こ、このパンケーキ代で、
→3　　俺一ヶ月は暮らせるんですけど！
4 高木　　：いつの時代のヒトだよ、お前は［笑い］
5 三葉（瀧）：うーん……
［私はしばし悩み、あ、そうだ、夢だったと気づく。じゃ、ま、いいか。お金も立花瀧のものだし。好きなもの食べよっと。］

『君の名は』p. 58

三葉（瀧）は、高木と司を聞き手として認識し、話している。それゆえ、二人が期待する俺という自称詞を選択している。

次の例(4)は作品②において、小梅（パパ）が父親の性と年齢を考慮して自称表現を選んでいる場面である。父親の同僚である、西野という女性に好意を抱かれ、食事に誘われて

いる場面である。小梅は西野の行動を異常に思い、自分を「中年男」と卑下して誘いを断ろうとしている。

例(4)
→1 小梅（パパ）：いや、本当に。あなたはまだ若いんだし、こんな中年男と
2　　食事なんかして、悪い噂でも立ったら、
3　　ご両親に申し訳が立たないよ
［冗談っぽく聞こえるように言ったけど、ゼンゼン無視された。構いません、とあたしの手を取った。すっごい熱かった。］
4　　ホントにホントに
［思わず地が出ちゃった］
5　　マジで、そういうの止めましょうって。会社なんだし、
6　　やっぱマズイでしょ

『パパとムスメの７日間』p. 400f

会社の同僚である西野からの誘いを断るために、1 行目で自分自身のこと「中年男」と自虐的に呼び、性的対象としての魅力を失っていることを示している。四十前後の男性のことを指す「中年男」は、男性性と年齢の二つの要因を含む表現である。

3.2.3 同一人物による自称詞の使い分けの場合

次の例(5)は作品①において、聞き手の親疎関係によって自称詞が変化する例である。一夫（一美）はまだ自分が一美と入れ替わったことに気づかずに帰宅する。そこで、その口調に母親が驚き、「あなたは誰なのか」と問う場面である。まだこの時は、一夫（一美）は自分を一夫として認識しているが、ここでは「おれ」（地の文）と「ぼく」を使い分けている。

例(5)
［―そういえば、たしかに、おふくろの目つきは、知らない人でも、見るような目つきをしている。とんでもないことになったなあ―そこで、おれは、やさしくおふくろにいった。］
→1 一夫（一美）：ママ、落ち着いて、しっかり、ぼくの顔を見てくれよ。
→2　　ね。ぼくは、ママのむすこの、斉藤一夫だろ？わかる？
3 ママ　　：ふざけないで！あなたが、あたしのむすこのわけはない
4　　でしょ。あなたは女の子じゃありませんか！

『おれがあいつであいつがおれで』p. 29

地の文では、母親を「おふくろ」と心の中で呼び、自分を「おれ」と呼んでいるが、実際の発話では、「ママ」と「ぼく」を使用している。このことから、聞き手と自分との関係性

を考慮した上で、自称詞や人称詞を選んでいることがわかる。

次の例(6)は作品②において、入れ替わった親子であるパパと小梅がそれぞれ、学校と職場に行く打ち合わせをしている場面である。パパ（小梅）は、娘に対して、職場の打ち合わせに出席するよう要請している。

例(6)

1 パパ（小梅）：中嶋に任せておいたんだが、雑誌関係のパブリシティに起用
2 するモデルの人選が残っている。明日その打ち合わせがある
→3 はずだが、私も、つまりお前もそこにいなければならない。
4 うまく話を合わせてくれ
5 小梅（パパ）：何、誰なの？KAT-TUN？

『パパとムスメの 7 日間』p. 240

例(1)で、娘の小梅に対して、「パパ」と自称したパパ（小梅）は、3 行目で、「私」にシフトしている。娘という話し相手は変わらない。しかし、「仕事」という社会的な話題について話しているため、家庭における役割から職場というより社会的なコンテクストに相応しい「私」をここでは使用している。このような一貫しない自称詞の使用は単に性によって決定されるのではなく、話し手の複数のアイデンティティ（メイナード 2017）によって交渉されていく。つまり社会文化的コンテクストによって左右されるものであり、自称詞の選択は不変なものではない。

直示では、一人称という範疇は「話し手が自身を指示する文法化された要素」（Levinson 1983: 62 筆者訳、Huang 2014: 175）であり、英語の場合、I は単に現在の発話者を指すことのみで機能する。さらにいえば、西欧の言語文化とは異なり、日本語では常に話し手を自称詞で指し示す必要がないことは、すでに見たとおりである。

これまで日本語の例を見てきたように、日本語では、相手との距離、認識、親疎関係などいくつかの社会文化的な要因によってはじめて選択されるものである。しかし、幼少期に自分のことを名前で呼んでいると、「わたし」と呼びなさい、などと指摘されることがある。このように、他人のことばづかいについて、何かコメントすることをメタ言語と呼ぶ。次節では、メタ言語に関する例を提示する。

4. 自称詞の使用に関するメタ言語分析

自称詞は、話し手自身を指し示す際に用いられる表現であるが、性別や年齢を理由に、自称詞を矯正されることがある。こうした他人のことばづかいに言及するメタ言語分析を通し、自称詞にどのようなイデオロギーが潜在しているのか検討する。

次の例(7)は作品①において、学校の構内でぶつかった一夫（一美）と校長先生が同じ病室に入院し、会話をしている。これを機に、校長先生は一夫（一美）に女子としてどのように振る舞うのか説教する場面である。

例(7)

1 校長先生　：いいかね、斉藤一美さん。こんどの事件のそもそもは、
2　　あんたが女の子なのに、暴力をふるったことにある。
3　　理由はいろいろあろうが、女の子が暴力を振るうなど
4　　ということは、どう考えても感心できない
→5 一夫（一美）：そんなこといったって、ぼくは、もともと男なんだし……
→6 校長先生　：おだまりなさい！女の子が『ぼく』とはなんでありますか！
→7　　女の子は『わたくし』または『わたし』と言いいなさい！」
『おれがあいつであいつがおれで』p. 88f

1 から 4 行目で、校長先生は、女子である以上、暴力的な行為は望ましいことではないと説教する。それを受けて、一夫（一美）は 5 行目で、「ぼくは、もともと男なんだし」とその行為が男性であることがその原因だと述べる。それを聞いた校長は、6 行目で女子には「ぼく」という自称詞はふさわしくないという評価を与え、7 行目で、「わたくし」か「わたし」を使うように強要している。このようなメタ言語行為は、一種のピグマリオン的な話し手の期待を表している。つまり、異性愛規範の男性から見たときの女子は「わたくし」あるいは「わたし」を使うべきある存在でいてほしいという願望の現れである。また、女子が男性語であるとされる「ぼく」を使うことは、異性愛規範の秩序を乱しうる脅威的存在なのかもしれない。Cameron (1995)は、こうした理想に基づくことばづかいへの矯正を「ことばの衛生（verbal hygiene）」と呼ぶ。

次の例(8)は作品③において、三葉（瀧）が、友人たちと屋上で昼食をとる場面である。三葉（瀧）にとっては、知らない学校だったため、遅刻をした。その理由として、道に迷ったと言い訳をしている。

例(8)
1 高木　　：お前さあ、どうやったら通学で道に迷えんだよ？
2 三葉（瀧）：えーと……
［とわたしは口ごもる。私たちは広い屋上の隅っこに三人で座っている。今は昼休みのはずだけれど、夏の日差しを避けてか周囲には人はまばら。］
→3 三葉（瀧）：えーと、あの、私…
→4 高木　　：ワタシ？
→5 司　　：ワタシ？
［高木くんと司くんが、怪訝そうに顔を見合わせる。しまった、今、わたしは立花瀧なんだ］
→6 三葉（瀧）：あ、その、ええと……あ、わたくし！
→7 高木　　：んん？
→8 司　　：んん？
→9 三葉（瀧）：僕！
→10 高木　　：はあ？
→11 司　　：はあ？

→12 三葉（瀧）：……俺？
［うむ、と怪訝そうな表情ながらも二人は頷く、なるほど「俺」ね。心得た！］
『君の名は』p. 54f

1 行目で遅刻した理由を問われ、3 行目で不意に三葉（瀧）は、「私」と口にした途端、4 と 5 行目で、高木と司は「ワタシ？」と繰り返し、驚きを示している。ここでも、例(2)と同様に、期待されていない自称詞を使用した場合、カタカナ表記され、その異質性を表している。こうした記述の仕方もメタ言語の一種であると考えられる。その後も、同様なやりとりが、「わたくし」に関して 6 から 8 行目で起こっている。9 行目では、ようやく「僕」にたどり着くものの、10 と 11 行目で「はあ？」と否定されている。興味深いのは、「僕」が男性性と結びつけられる自称詞にも関わらず、ここでは友人によって却下されている。その後、12 行目で躊躇しつつ、このコンテクストでは、「俺」が瀧とその友人の間柄では最もふさわしい自称詞であるということが判明した、という流れである。一連の、友人によって発せられた驚き（4 と 5、 7 と 8、10 と 11 行目）は、直接的でないものの、いずれもメタ言語的反応である。このことから自称詞は、話し手の性別だけでなく、相手との関係から選択されることがわかる。入れ替わった相手のふさわしい自称詞を使うことは、すなわち聞き手の期待（仲間であることの確認）に応えている。

日本語にはさまざまな自称詞があることは、日本語の豊かさの一つと見なされてきた。しかし、今ある自称詞が話し手を〈女〉か〈男〉のどちらかとして表現するものしかないとしたら、日本語の自称詞はまだ十分に豊かではないとも考えられるし、もしかしたら、「I」だけのほうがよっぽど使いやすいかもしれない、と中村（2007b: 167）は述べる。

本稿で扱った３作品が、必ずしも意図的に異性愛規範に基づいた自称詞の使用を推奨するものとは限らない。しかし、作者が意識しているか、いないかに関わらず登場人物が性による「正しい自称詞」を使う、使わされている背景にはイデオロギーが隠れている。こうした、自然とも思える自称詞の使用を小説といったメディアにおいて繰り返し生産されることで、ますます自称詞は性と強く結ばれていく。本稿では、入れ替わった相手の性に基づく自称詞の使用を分析することによって、人々が持っているイデオロギーとメタ言語をあぶり出した。

ただし、いくら小説だからといっても、多種多様性を認める社会では性に基づく自称詞を直接的に言及することは憚れる。これらの作品はあえて間接的に入れ替わった相手に使用させる点で巧妙といえる。

5. まとめ

本稿では、男女が入れ替わる小説を通して、日本語の自称詞にまつわるイデオロギーとメタ言語を分析した。そして、その結果から、いかに自称詞と性的イデオロギーが強く結びついているかを明らかにした。

しかし、茨城の農家の女性（Sunaoshi 2004）、二丁目のバーで働く女性（Abe 2004）が「俺」という自称詞を使う研究報告が示すように、自称詞と性の結びつきは必然ではない。また、同一人物においても、複数の人称代名詞を使っているあるいは、心の文と実際の発話が異

なる例が見られた。こうした人称代名詞の使用が一貫しないことは話し手の性だけに関係するものではなく、アイデンティティとも結びついているといえる。メイナード（2017）が報告しているように、話し手は複数のアイデンティティを表すことができる。はじめは、あるスピーチコミュニティという場で、人称代名詞の使用が交渉され、それが次第に慣習化されていく。そうした場で、受け入られた以外の人称代名詞を選択すると、不適格という評価を下されてしまうのだ。

分析した三作品を通時的に見れば、『おれがあいつであいつがおれで』と比べて『君の名は』では、自称詞の使用率の減少が認められた。この結果は、自然発話では、主語を言わないという研究報告（Cf. 金谷 2002）や日常経験が反映されているとも捉えられる。しかし、いまだなお「自称詞の正しさ」という言説が再生産され、はびこっていることは本研究が示したように明らかである。

参考文献

Abe, Hideko (2004) Lesbian bar talk in Shinjuku, Tokyo, in Okamoto, S and J.S., Shibamoto Smith (eds.) *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People*, Oxford University Press, 205-221.

Bell, Allan (1984) Language style as audience design, *Language in Society* 13: 145- 204.

Cameron, Deborah (1995) *Verbal Hygiene*. Routledge.

Hanks, William F (2005) Explorations in the deictic field", *Current Anthropology* 46 (2): 191-220.

東森勲（2012）「意味のコンテクスト依存性」中島信夫編『語用論』朝倉書店，13-32.

Huang, Yan (2014) *Pragmatics*, Oxford University Press.

井出祥子（1982）「待遇表現と男女差の比較」國廣哲彌編『日英語比較講座第５巻　文化と社会』

大修館書店, 107-169.

Inoue, Miyako (2003) Speech without a speaking body: "Japanese women's language" in translation, *Language & Communication* 23: 315-330.

金谷武洋（2002）『日本語に主語はいらない』講談社.

金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店.

久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店.

Levinson, Stephen C (1983) *Pragmatics*, Cambridge University Press.

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法（改訂版）』くろしお出版.

中村桃子（2007a）『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房.

中村桃子（2007b）『〈性〉と日本語：ことばがつくる女と男』日本放送出版協会.

成岡恵子（2016）「相互行為からみた指示詞と社会文化的コンテクスト」藤井洋子・高梨博子編『コミュニケーションのダイナミズム—自然発話データから』ひつじ書房, 39-62.

メイナード・泉子 K（2017）『話者の言語哲学』くろしお出版.

Shibatani, Masayoshi (1990) *The Languages of Japan*, Cambridge University Press.

Sunaoshi, Yukako (2004) Farm women's professional discourse in Ibaraki, in Okamoto, S and J.S., Shibamoto Smith (eds.) *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People*, Oxford University Press, 187-204.

鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波書店.

鈴木孝夫（1982）「自称詞と対象詞の比較」國廣哲彌（編）『日英語比較講座第５巻　文化と社会』　大修館書店, 17-59.

［データ］

五十嵐貴久（2006 [2009]）『パパとムスメの７日間』幻冬社.

新海誠（2016）『小説　君の名は』角川書店.

山中恒（1980 [2012]）『おれがあいつであいつがおれで』角川書店.